

かた気に鎌鋏もて沖の
 をちこち搔^(かき)搜^(さぐ)り拾ふ
 蛤あつものにめくる
 さかつき舟のうちけに
 ことわりや^(おおはまぐり)蜃の楼に
 三味ひくしつむかなと
 いひしはおもひ出するゝ
 岸によるてふ忘^(わす)貝摘

(44) 住吉の浜の名産。



長映浦の汐干

に遊かなむ忘草⁽⁴⁵⁾又浅

澤のわすれ水⁽⁴⁶⁾は杜若の

名にたかく慈恩寺⁽⁴⁷⁾の

花は後醍醐帝のふ

たゝへ御輿をかへさ

れしその恩賞をあら

はして車返しの名を

得たり大歳⁽⁴⁸⁾のやしろ五

(45) 一説に、帝に忘草献上の時

白木の台にのせ箱に治めて
他見なきよう言上する。帝
は紫宸殿において覧され
緑の小松一本植えられる。
されば神秘とする忘草は小
松なりともいう。

(46) 浅沢小野の細江の流れをい

う。浅沢は古来燕子花の名
所なり。今は田圃なり。

忘貝・忘草・忘水、これを
住吉の三忘という。

(47) 住吉社より東にあり。本尊

十一面観音、聖徳太子の
作。車返しの桜が有名。

(48) 本殿南一町西向の社なり。

祭神 素盞鳥尊の御子大歳
神。五穀神なり。近年浪花
の商人この神に祈れば、金
銀取引の契約の不变を節季
前に祈ると売掛の金銀速や
かに集まるといふ。詣人常
に間断なし。



車返桜 浄土寺 大歳神

穀をは豊かにこそと

祈りつゝあゆみをはこ父

人々や霰松(49)はら安立町

杓の柄なかき小まち茶(50)

屋難波(51)やの庭数十丈

笠をひろけし如くにて

ひと本の松えたをしく

五月のすえはみたしろに

(49) 今の安立町をいう。往昔は皆松原なり。後に安立といふ人ここを開拓し、町続きとする。

(50) またの名を土手茶屋といふ。住吉の松原に土居を設けて茶店を出す。柄の長い杓に茶碗をのせ、往ききの人に茶を勧める。この茶店の女は夫を持たぬゆえ小町茶屋といふ。

(51) 安立町にあり。難波屋の前栽にある松は、幹の高さ七尺、東西十五間余り、南北十三間余り、周囲およそ五十間、年々四方に繁茂して柄柱の数かぞえがたし。奇代の霊松なれば往来の旅人ここに寄りて皆賞讃するといふ。



安立町 難波屋名松

乳守の遊女を早乙女
 に天神供の苗⁽⁵²⁾を植む
 田楽法師は舞踏の曲
 甲冑の社僧双方より
 棒を振らせて敲^(たた)きあふ
 これ此式と蝗^(いもむ)をはらひ
 除くのわさとかや水無
 月三十日は大祓⁽⁵³⁾かれは

(52) 神田に苗を植える祭式なり。神宮寺の社僧甲冑を着て遊戯する。また泉州大津より田楽人來たりて芸を行う。また堺の津乳守の遊女來りて田植をす。この日遠近より参詣の人群参し雜沓する。

(53) 数百人が手毎に炬を点じ、あたかも白昼の如し。大坂の迎え桃灯数千照らし列をして酒機嫌に声をあげ、神輿を迎える。その光景筆紙に尽し難し。



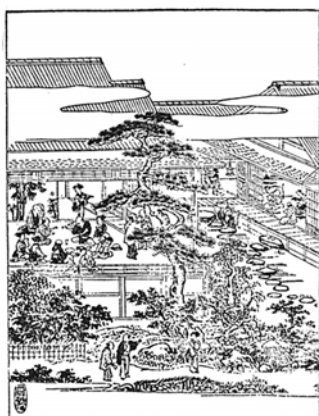
植女例式

炬ふりたてつこれは神
 燈を耀(かがやく)かし大阪堺立
 かはり還幸を送り迎ふ
 るを火替の神事と
 申なり疲るゝ足も伊丹屋(54)
 の席に支度や三文茶釜
 思ひくくに名産を香附子(こうぶし)
 松露たうからし呉魯々々



住吉の御神夏越の大祝

(54) 料亭伊丹屋と三文字屋。紅白粉で美しく化粧せし仲居、嬌声張り上げて客引し、客席で料理を運びお酌をする。客の絶え間なく大いに繁昌なす。



住吉新家 伊丹屋柏戸 座敷庭前